

聖書は肉食・動物をどう扱っているか

——ヨシュア記，士師記，ルツ記，サムエル記上下——

奥田和子

How the Bible Treats the Eating of Meat and Animal

——Joshua, Judges, Ruth, 1 Samuel, 2 Samuel——

OKUDA Kazuko

Abstract : The Book of JOSHUA describes the deeds of Joshua, the successor of Moses.

The crossing of the Jordan and the conquest of Jericho, also the total sovereignty established by the tribes.

The Book of Judges is to show that the fortunes of Israel depended upon the obedience or disobedience of the people to God's law. Whenever they rebelled against him, they were oppressed by pagan nations ; when they repented, he raise up judges to deliver them.

The Books of Samuel comprise the history of about a century, describing the close of the age of the Judges and the beginning of monarchy in Isral under Samuel and David.

So far, having described about meat-eating, animal, (2, 3, 4), here, I would like to continue to describe on the meat-eating, and animal in the Book of Joshua, the Book of Judges and the Books of Samuel of the Old Testament.

はじめに

ヨシュア記 (BC 1235-1200) は、モーセの死後ヨシュアがイスラエル人の先頭に立ってカナン地方を攻略し、12部族に土地を分割した経緯を述べたものである。主の導きにしたがって先住民と戦った様子が描かれている。

士師記 (BC 1235-1200) は、神の律法に不従順であったイスラエルの民がいかに他民族の圧迫を受けて苦しみ、一方で彼らが悔い改めて神に訴え救済されたかを物語っている。背信、圧迫、改悛、救済の繰り返しが語られている¹⁾。

サムエル記は、古代イスラエルにおける王政導入をめぐる諸事情とダビデのもとでのイスラエル統一、王国の確立まで (BC 11世紀後半から11世紀前半) の出来事が記述されている。

これまで、創世記から申命記までの肉食、動物に関

する記述を検討してきたが²⁻⁴⁾、ここでは同じく、聖書⁵⁾におけるヨシュア記、士師記、サムエル記における肉食と動物の取り扱いについて述べたい。

1 ヨシュア記

ヨシュア記と士師記は1つの物語を違った角度から物語っている。ヨシュア記では、イスラエル人が一致協力して一気にカナンを征服し、各部族に土地を割り当てた模様が語られ、一方、士師記は、まず土地が割り当てられ、その後各部族が割り当てられた土地を少しずつ征服していった様子が語られているという⁶⁾。

1 攻略地で祭壇を築く一献げ物といけにえ

ヨシュア記 8: 30-35

アイの滅亡

「そのころ、ヨシュアはエバル山にイスラエルの神、主のための祭壇を築いた。……………彼らはそ

の上で、主に焼き尽くす献げ物と和解の献げ物をささげた。……それはモーセがかつて命じたように、イスラエルの民を祝福するためであった。……」

ここで焼き尽くす献げ物と和解の献げ物がささげられているが、その内容は具体的に書かれていない。焼き尽くす献げ物はレビ記1:1-17, 和解の献げ物はレビ記3:16の記述によると牛, 羊, 山羊のいずれかであろう。

ヨシュア記 22:10

ヨルダン川東岸諸部族の帰還

「ルベンとガドの人々、およびマナセの半部族はカナンの土地にあるヨルダン川のゲリロトに着いたとき、そこに一つの祭壇を築いた。それは目立って大きい祭壇であった。」

ヨシュア記 22:23

「……その上で、焼き尽くす献げ物、穀物の献げ物、和解の献げ物をささげたとすれば、主御自身が罰してくださるでしょう。」

同じく 22:26に

「…焼き尽くす献げ物やその他の献げ物をするためではなく、…」

同じく 22:27にも

「わたしたちが焼き尽くす献げ物や和解の献げ物をささげて主を礼拝するのは、後日、あなたたちの子供が私たちの子供に向かい……」

同じく 22:28にも

「……焼き尽くす献げ物や和解の献げ物をささげるためではなく、あなたたちとわたしたちとの間柄を示す証拠なのです。」

同じく 22:29

「今日、主に逆らい、主に背いて、主の幕屋の前にいるわたしたちの神、主の祭壇とは別に祭壇を築き、焼き尽くす献げ物、穀物の献げ物、和解の献げ物をささげるつもりなど、全くありません。」

祭壇が築かれたのは、そこで主に焼き尽くす献げ物を捧げるためではなく、記念碑的なもので遠くからでも見えるほど目立って大きい祭壇であった⁷⁾。

8章と22章の2カ所しか祭壇、献げ物という表現はでてこない。とくに22章ではヨルダン川東岸へ帰還する諸部族が祭壇を築くことは神にたいする背信であると非難されたことにたいして、かれらは反論する。すなわち、この祭壇は焼き尽くす献げ物をささげるためではなく「神聖な場所の象徴」として築くのだという。後の世、子や子孫に主が神であることを証し

するための記念碑なのだという。

戦乱の日々でも、新しい祭壇を築き主にいけにえをささげていた。

2 日常食一旅の食糧

ヨシュアはヨルダン川を渡るに先だつて民の役人たちに命じた。

ヨシュア記 1:11

モーセの後継者ヨシュア

「……おのおの食糧を用意せよ。……あなたたちは、あと三日のうちに、このヨルダン川を渡る。あなたたちの神、主が得させようとしておられる土地に入り、それを得る。」

民は水かさの多い春のヨルダン川を、神に守られ助けられながら難なく渡ることができた。(ヨシュア記3:1-17)

その旅の食糧は、練り粉で酵母を入れないパン菓子(出エジプト記12:39)と同じようなものかどうか中はわからない。

イスラエルの人々はギルガルに宿営し、エリコの平野で過越祭を祝った。この様子が以下のように述べられている。

ヨシュア記 5:10-12

契約のしるし

「イスラエルの人々はギルガルに宿営していたが、その月の十四日の夕刻、エリコの平野で過越祭を祝った。過越祭の翌日、その日のうちに彼らは土地の産物を、酵母を入れないパンや炒り麦にして食べた。彼らが土地の産物を食べ始めたその日以来、マナは絶え、イスラエルの人々に、もはやマナはなくなった。彼らは、その年にカナンの土地で取れた収穫物を食べた。」

過越で食べるはずの羊の肉の記述がない。酵母を入れないパンと炒り麦を食べている。「炒り麦とは十分に熟して柔らかくなった麦を火で焙ったもので、労働者の昼食や携帯用食糧とされた」⁸⁾

その後、ヨシュアは全軍隊を引き連れて次にアイ(地名:エリコよりさらに西側)へ攻め上がった。エリコを占領したときのようにアイも占領せよという。このようにしてアイは完全に焼き尽くされて滅んだ(アイの滅亡 ヨシュア記8)。

つぎは、ギブオン人との出会いである。ギブオンの住人は、ヨシュアがエリコとアイに勝利したことを聞き、先手を打って賢く立ちまわった。ギブオンの住人は使者を装い、御覧下さいと行って旅の食糧一干から

びたぼろぼろのパンとぶどう酒を携え差し出してみせ、どうか今平和協定を結んでくださいと申し出たのである。(ヨシュア記 9: 12-13)

ギブオン人の服従

「御覧ください。これがわたしたちのパンです。ここに来ようと出発した日に、食糧として家から携え出たときにはまだ温かったのが、今はすっかり干からびてぼろぼろです。このぶどう酒の革袋も酒を詰めたときは真新しかったのですが、御覧ください、破れてしまいました。わたしたちの外套も靴も、はるかな長旅のため、古びてしまいました。」

ギブオンは紀元前 8, 7 世紀にはこの地方におけるぶどう酒産業とその輸出の中心であった⁹⁾。ぶどう酒の革袋は山羊、羊、子山羊などの皮で作った袋で、水やぶどう酒を入れて運んだ⁹⁾。

ヨシュア記 9: 14-15

ギブオン人の服従

「男たちは彼らの食糧を受け取ったが、主の指示を求めなかった。ヨシュアは彼らと和を講じ、命を保障する協定を結び、共同体の指導者たちもその誓いに加わった。」

パンとぶどう酒を受け取って協定締結の儀式として食事を共にしたという¹⁰⁾。パンとぶどう酒が旅の食糧として持ち歩かれていたことがわかり、興味深い。肉などはない。このように質素な食べ物を共に食べながら友好条約を結んだ事は興味深い。

旅の食糧はパンとぶどう酒であり、肉や贅沢な食べ物はないことがわかる。

3) 分捕り品—家畜

ヨシュア記 8: 2

アイの滅亡

「主はヨシュアに言われた。……全軍隊を引き連れてアイ(死海の西北)に攻め上りなさい。アイの王も民も町も周辺の土地もあなたの手へ渡す。……分捕り品と家畜は自分のために奪い取ってもよい。…」

ヨシュア記 11: 14

ハツォルとその同盟国の征服

「これらの町々の分捕り品と家畜はことごとく、イスラエルの人々が自分たちのために奪い取った。……」

ヨシュア記 14: 4

ヨルダン川の西側

「レビ人は、カナン土地の中には住むべき町と

財産である家畜の放牧地のほか、何の割り当て地も与えられなかった。」

ヨシュア記 21: 1-4

レビ人の町

「……イスラエルの人々の部族の家長たちのもとに来て、「主は、わたしたちに住む町と家畜の放牧地を与えるよう、モーセを通してお命じになりました」と申し出た。イスラエルの人々は、主の命令に従って、自分たちの嗣業の土地の中から次の町々とその放牧地をレビ人に与えた。」

ヨシュア記 21: 41-42

レビ人の町

「イスラエルの人々の所有地の中で、レビ人の町は総計四十八で、それに属する放牧地があった。どの町も例外なく周囲に放牧地を持っていた。これらの町はみなそうになっていた。」

レビ人(神に仕える人・祭司)の土地は必ず放牧地をもっていたことがわかる。しかし、放牧や家畜の様子は記されていない。

ヨシュア記 22: 8

ヨルダン川東岸諸部族の帰還

「彼らに言った。「多くの財宝、多数の家畜、金、銀、銅、鉄および数多くの衣服を天幕に持ち帰りなさい。敵から分捕った物は、兄弟たちと分け合いなさい。』」

兄弟というのはヨルダン川東岸に残っているすべての人々をさし、分捕り品は女子どもを含む共同体全体で分け合うのが定めであった⁷⁾。

分捕り品の分配では、家畜が金、銀、銅、鉄よりも先に書かれていて重きがおかれていたのであろう。また、土地の分配では、必ず放牧地がついていること、つまり、草が生え家畜が飼えることが重要視されていたのであろう。

4 動物の扱い

ヨシュア記 15: 18

ユダ族の境界線

「……彼女がろばの脊から降りると、カレブは、「どうしたのか」と言った。彼女は言った。お祝いをください。わたしにネケブの地をくださるなら、溜池も添えてください。」

ネゲブ荒野のような乾燥した地方では、井戸や溜池は非常に重要なものであった¹¹⁾。ろばは人を載せている。

ヨシュア記 11: 9

「ヨシュアは、彼らに対して主の告げたとおりにし、馬の足の筋を切り、戦車を焼き払った。」

戦車は普通2頭立ての馬で引かれていた。乗るのは、1人は御者と1人は戦士である¹²⁾。

以上のことから、食べ物として肉を食べたという記述は全くない。また神に献げる献げ物として犠牲獣(牛、羊、山羊)が用いられたという記述もない。しかし、侵略した土地では多くの家畜を奪い取り、あるときは焼き払い、あるときは持ち帰っている。

また、動物は、ろばと馬が人や荷物を運び、戦車を引くなどして人間の役に立っていた。

戦時下の物語であり、神への献げ物の記述はなく、敵方の動物にたいしては、残酷な面が見える。ゆとりのない暮らしを営んでいたのではないかと推察する。

2 士師記

士師記は、イスラエルの指導者ヨシュアの死の直後から、預言者サムエルによる王国が成立するまでの、イスラエルの民族の歴史を述べたものである。士師記は紀元前1230~1200年頃の現実を背景にしているという。士師時代は400年以上におよんでいるという¹³⁾。

1 神への献げ物一いけにえ

士師記 2: 4-5

カナンの征服

「……民は声をあげて泣いた。こうしてこの場所の名をボキム(泣く者)と呼び、彼らはここで主にいけにえをささげた。」

士師記 20: 26

ベニヤミン族の犯行

「イスラエルの人々は皆、そのすべての軍団と共にベテルに上って行き、主の御前に座り込んで泣いた。その日、彼らは夕方まで断食し、焼き尽くす献げ物と和解の献げ物を主の御前にささげた。

イスラエルの人々は、ベニヤミンとの戦いに敗れ神の加護がなかったことを悔やんで泣いた。そして神に懺悔し和解を祈った。何を献げ物にしたかは書かれていない。

士師記 21: 2-4

ベニヤミン族の犯行

「民はベテルに帰って、夕方まで神の御前に座り、声をあげて泣き叫んだ。「イスラエルの神、

主よ。なぜイスラエルにこのようなことが行われ、今日イスラエルから一つの部族は欠けることになったのですか。」翌日、朝早く民は起きて、そこに祭壇を築き、焼き尽くす献げ物と和解の献げ物をささげた。」

士師記 6: 25-26

ギデオン

「その夜、主はギデオンに言われた。「あなたの父の若い雄牛一頭、すなわち七歳になる第二の雄牛を連れ出し、あなたの父のものであるバアルの祭壇を壊し、その傍らのアシェラ像を切り倒せ。あなたの神、主のために、この頂上に、よく整えられた祭壇を造り、切り倒したアシェラ像を薪にして、あの第二の雄牛を焼き尽くす献げ物としてささげよ。」

(あなたの父とは、ヨシュアをさす。あなたとはヨシュアの子ギデオンである)

イスラエルの人々はカナンの地で畑の神々であるバアルを崇拜し、自らの主を忘れたため、自らの主の礼拝に戻るためである。バアルとは、いくつかのカナン人の神々をさす言葉。風と雨の主と考えられたが、土地の豊穡と関係することから大地自身の主とみなされた¹⁴⁾。

ここには焼き尽くす献げ物が登場する。若い雄牛が献げられている。人々はカナン地方の異教の神々を崇拜していたのである。

イスラエルの民が悔いて神に献げ物をするのは上記の4例である。

2 旅の食糧—パンとぶどう酒

士師記 19: 18-19

ベニヤミン族の犯行

「彼は老人に答えた。「わたしたちは、ユダのベツレヘムからエフライム山地の奥にあるわたしの郷里まで、旅をしているところです。ユダのベツレヘムに行って、今、主の神殿に帰る途中ですが、わたしたちを家に迎えてくれる人がいません。ろばのためのわらも飼い葉もありますし、わたしとこの女、あなたの僕の連れている若者のためのパンもぶどう酒もあります。必要なものはすべてそろっています。」

旅人が必需品として持ち歩いているものを示している。その中味に食べ物が示されていて、パンとぶどう酒である。

3 天幕の中で

天幕とは、柱と綱と杭を用いて山羊の皮で覆ったもので、パレスチナに定住する以前の時代、イスラエル人とその先祖にとって常用の住居であった¹⁵⁾。

士師記 4: 1-19

デボラとバラク

「エフドの死後、イスラエルの人々はまたも主の目に悪とされることを行い、……ラピドトの妻、女預言者デボラが、士師としてイスラエルを裁くようになったのはそのころである。……シセラが彼女に、「喉が乾いた。水を少し飲ませてくれ」と言うので、彼女は革袋を開けてミルクを飲ませ、彼を覆った。」

水を求めたにもかかわらずミルクを与えた。シセラが求めた以上のサービスをして相手を安心させた¹⁶⁾。

水よりもミルクの方が喜ばれたのだろう。

士師記 5: 16

デボラの歌

なぜ、あなたは二つの鞍袋の間に座して
羊の群れに吹く笛を聞くのか。

デボラの歌は、バラクがシセラに勝利を取めた直後の戦勝歌といわれる。

二つの鞍袋とは革袋であると言う説と、羊の囲いであると言う説もある。ルベンの土地は家畜の飼育に適していた。しかし、東は荒れ野に面し、彼らの家畜をねらって襲って来る外敵に対して絶えず注意を払っていなければならなかった¹⁷⁾。

士師記 5: 24-25

デボラの歌

女たちの中で最も祝福されるのは
カイン人ヘベルの妻ヤエル。
天幕の中にいる女たちの中で
最も祝福されるのは彼女。
水を求められて
ヤエルはミルクを与えた。

貴人にふさわしい器で凝乳を差し出した。

〈凝乳=curd¹⁸⁾, cream¹⁹⁾〉

ヤエルという女性は敵方の軍勢の兵士シセラにミルクを与えたのである。相手がだれであれ、旅人をもてなし、助けを求めるものを庇護するのが遊牧民の倫理であった。そこでヤエルは旅人をいったんはもてなし、その後シセラがイスラエルの敵であることを知っていた彼女は、彼女の判断でシセラを殺害した。ヤエルはイスラエル側から賞賛された²⁰⁾。

4 肉料理—神の御使いに

士師記 6: 19-21

ギデオン

「ギデオン（ヨシュアの子）は行って、子山羊一匹、麦粉一エファの酵母を入れないパンを調え、肉を籠に、肉汁を壺に入れ、テレビンの木の下にいる方に差し出した。神の御使いは、「肉とパンを取ってこの岩の上に置き、肉汁を注ぎなさい」と言った。ギデオンはそのとおりにした。主の御使いは、手にしていた杖の先を差し伸べ、肉とパンに触れた。すると、岩から火が燃え上がり、肉とパンを焼き尽くした。主の御使いは消えていた。」

ここでは、神への献げ物がされている。子山羊の肉料理をおもてなしのつもりで神の御使いにお出ししたが、神の御使いはそれを焼き尽くした。神から焼き尽くす献げ物として受け入れられたことを示している²¹⁾。

子山羊の肉は神の使いがやってきた時にお出しするのであった。しかし、神の御使いは食べることを拒み神にささげている。

士師記 13: 1-20

サムソン

「イスラエルの人々は、またも主の目に悪とされることを行ったので、主は彼らを四十年間、ペリシテ人の手に渡された。……今後汚れた物も一切食べないように気を付けよ。……彼女は……汚れた物を一切食べてはならない。……マノアは主の御使いに言った。「あなたをお引き止めしてもよいでしょうか。子山羊をごちそうさせていただきます。」主の御使いはマノアに答えた。「あなたが引き止めても、わたしはあなたの食べ物を食べない。もし焼き尽くす献げ物をささげたいなら、主にささげなさい。」マノアは、その人が主の御使いであることを知らなかった。……マノアは子山羊と穀物の献げ物を携え、岩の上に乗って主、不思議なことをなさる方にささげようとした。マノアとその妻は見ていた。すると、祭壇から炎が天に上るとき、主の御使いも、その祭壇の炎と共に上って行った。」

マノアは偶然出会った人を大事な客としてもてなそうとする²²⁾。神の御使いとは知らずに子山羊をごちそうさせていただきますとマノアは言っている。子山羊は御馳走として位置づけされている。神の御使いはそれを食べていない。最後には焼き尽くす献げ物になった。

上記は2つとも子山羊の肉料理をだしたにもかかわらず、岩の上で焼き尽くす献げ物と化して食べられたわけではない。客人に肉の料理をだすのではなく、神にささげよという。

5 土産物—子山羊

士師記 15: 1

サムソン

「しばらくして小麦の収穫のころ、サムソンは一匹の子山羊を携えて妻を訪ね、「妻の部屋に入りたい」と言ったが、彼女の父は入らせなかった。

サムソンが妻を訪ねる手土産として子山羊を一匹持参しているのは興味深い。

6 財産—家畜

士師記 18: 21

ダン族の移動

「彼らは子供、家畜、家財を先頭に前に進んで行った。彼らはミカの家を遠く離れてから、ミカの家近くに住む家族の者が呼び集められ、ダンの人々に追いついて来て、呼びかけた。」

イスラエル諸部族の中で、嗣業の土地が与えられていなかったため、ダンの部族は住み着くための嗣業の土地を探し求めていた。そこで見つけた土地をめざして攻めていくために移動を開始した。そのときの引越荷物の中に、家畜がある。

7 動物の種類と扱い

① 雌ろば

士師記 5: 10

デボラの歌

栗毛の雌ろばに乗り
敷物を置いてその脊に座り
道を行く者よ、歌え。

ろばは貴人の乗物として示されている²³⁾。

また、士師としてイスラエルを裁いたヤイルはろばを30頭所有し、それに乗っていた。(士師記 10: 3) 夫が一輓のろばを連れて出で立ち… (士師記 19: 3) などがある。

② 馬

士師記 5: 22

デボラの歌

そのとき、馬のひづめは地を踏み鳴らす。
駿馬の一隊が突き進む。

馬のひづめは地を鳴らす軍馬の凄まじい勢いを描写

する²³⁾。

馬は戦に駆り立てられている

③ らくだ

士師記 7: 12

デボラの歌

らくだも海辺の砂のように数多く、数えきれなかった。

その他に、らくだの首に飾り物がまきつけてあったと書かれていて、(士師記 8: 21, 26) 戦いの時それを奪っている。

④ 若い獅子

士師記 14: 5

サムソン

「タイムナのおどろ畑まで来たところ、1頭の若い獅子がおほえながら向かって来た。」

⑤ 蜜蜂

士師記 14: 5

サムソン

「…獅子の死骸には蜜蜂の群れがいて、蜜があった。……」

⑥ 雌牛

士師記 14: 18

サムソン

するとサムソンは言った。
わたしの雌牛で耕さなかったら
私の謎は解けなかつただろう。

わたしの雌牛とは、サムソンの愛妻を唆してなぞの答えを聞き出したこと²⁴⁾。

⑦ ジャッカル

士師記 15: 4

サムソン

「サムソンは出て行って、ジャッカルを三百匹捕らえ、松明を持ってきて、ジャッカルの尾と尾を結び合わせ、……」

ジャッカルとはキツネである²⁵⁾。

⑧ いなご

⑨ 動物の真の価値

士師記 6: 1-5

ギデオ

「イスラエルの人々は主の目に悪をされることを行った。主は彼らを七年間、ミディアン人の手に渡された。ミディアン人の手がイスラエル人に脅威となったので、イスラエルの人々は彼ら避けるために山の洞窟や、洞穴、要塞を利用した。イスラエルが種を蒔くと、決まってミディアン人

は、アマレク人や東方の諸民族と共に上って来て攻めた。彼らはイスラエルの人々に対して陣を敷き、この地の産物をガサに至るまで荒らし、命の糧となるものは羊も牛もろばも何も残さなかった。彼らは家畜と共に、天幕を携えて上ってきたが、それはいなごの大群のようで、人もらくだも数知れなかった。彼らは来て、この地を荒らしまわった。]

動物は可愛がられ、尊ばれる存在としてよりも、人間が利用できるかどうかという視点で見られているようである。戦争という環境のなかで、人間同士が殺戮してあっているなかで動物をいたわる表現がない。そんな中で⑨は聖書の教え（創世記 8：15-17 レビ記 22：27-28、民数記 22：22-23 など）を示している。

なお、ルツ記には取り出すべき該当の記述がなかった。

3 サムエル記上

サムエルは 12 部族の指導者が分散して治める古い体制から、王政・統一体制に導くための橋渡しの役割をしたといわれる。預言者、士師、祭司、国の指導者という複数の役割を担ってペリシテ人の脅威に立ち向かった。そして、サウルとダビデをイスラエルの最初の王に任命した²⁶⁾。

1 神への献げ物—いけにえ

サムエル記上 1：21

ハンナ、サムエルをささげる

1 年が経過し、また年ごとのいけにえをささげる時期がやってきた。

「さて、夫エルカナが家族と共に年ごとのいけにえと自分の満願の献げ物を主にささげるために上って行こうとしたとき……」

サムエル記上 1：24-28

ハンナ、サムエルをささげる

「ハンナは三歳の雄牛一頭、麦粉……を携え、その子（サムエル）を連れてシロの主の家の上って行った。この子は幼子にすぎなかったが、人々は雄牛を屠り、その子をエリのもとに連れて行った。……彼らはそこで主を礼拝した。」

子供をさざかりたいと願っていたその願いがなかったので、サムエルを授かったお礼にサムエルを連れて主に礼拝し、雄牛の献げ物をしている。

サムエル記上 2：13-14

ハンナの祈り

ペリシテ人は、主の箱をどのように返したらよいか尋ねた。すると、イスラエルの神の箱を返すにあたっては必ず賠償の献げ物と共に返さねばならないと答えた。

サムエル記上 6：7-14

神の箱の帰還

「今、新しい車一両と、まだ、軛をつけたことのない、乳を飲ませている雌牛二頭を用意しなさい。雌牛を車につなぎ、子牛は引き離して小屋に戻しなさい。主の箱を車に載せ、賠償の献げ物として……人々は車に使われた木材を割り、雌牛を焼き尽くす献げ物として主にささげた。

賠償の献げ物として、雌牛を焼き尽くす献げ物として主にささげている。

サムエル記上 7：9

イスラエルの指導者サムエル

「サムエルはまだ乳離れしない小羊一匹を取り、焼き尽くす献げ物として主にささげ、イスラエルのため主に助けを求めて叫んだ。主は彼に答えられた。」

サムエルは犠牲をささげる祭司的な役割をささげている²⁷⁾。

サムエル記上 10：8

「わたし（サムエル）より先にギルガルに行きなさい。わたしもあなた（サウル）のもとに行き、焼き尽くす献げ物と和解の献げ物をささげましよう。…

サムエル記上 13：9-10

ペリシテ人との戦い

「サウルは「焼き尽くす献げ物と和解の献げ物を持って来なさい」と命じて、焼き尽くす献げ物をささげた。」

焼き尽くす献げ物をささげ終わったとき、サムエルが到着した。

サムエル記上 15：22

サムエルは言った。

主が喜ばれるのは

焼く尽くす献げ物やいけにえであろうか。

むしろ、主の御声に聞き従うことではないか。

見よ、聞き従うことはいけにえにまさり

耳を傾けることは雄羊の脂肪にまさる。

サムエル記上 20：29

ダビデとヨナタン

彼はわたしに、『町でわたしたちの一族がいけにえ

をささげるので、兄に呼びつけられています。御厚意で、出て行かせてくだされば、兄に会えます』

サムエルは、主が喜ばれるものは、焼き尽くす献げ物やいけにえであろうかと疑問をなげかける。それよりむしろ、主の御声に聞き従うことではないかという。神と民との関係が本質から離れ形骸化していることを指摘している。

2 献げ物のあと肉を食べる

サムエル記上 1: 1-31 (BC 1050-1002)

サムエルの誕生

「エフライムの山地に一人の男がいた。その名をエルカナと言った。「エルカナは毎年自分の町からシロに上り、万軍の主に礼拝し、いけにえをささげていた。…いけにえをささげる日には、エルカナは妻ベニナとその息子たち、娘たちにそれぞれの分け前を与え、ハンナ（もう一人の妻）には一人分を与えた。」

「さて、シロでのいけにえの食事が終わり、ハンナは立ち上がった……」(1: 9)

ここでささげるいけにえは、焼き尽くす献げ物ではなく、いけにえをささげた後、祭司は肉を家族一妻や息子、娘と分けて食べていたことがわかる。

サムエル記上 9: 12-13

サウル、油を注がれて王となる

「……彼ら（サウルと若者）は彼女たちに尋ねた。「ここに先見者がおられますか。」娘たちは答えて言った。「はい、おられます。この先です。お急ぎなさい。今日この町に来られたのです。聖なる高台で民のためにいけにえがささげられるのは今日なのです。町に入るとすぐ、あの方に会えるでしょう。あの方は食事のために聖なる高台に上られるところです。人々はあの方が来られるまでは食べません。あの方がいけにえを祝福して下さるからです。祝福が終わると、招かれた者が食べるのです。今上って行けば、直ぐにあの方に会えるでしょう。」

サムエル記上 9: 22-24

ベニヤミン族に一人の男がいた。名をキシユといい彼にはサウルという息子がいた。

「サムエルはサウルと従者を広間に導き、招かれた人々の上座に席を与えた。三十人ほどの人が招かれていた。サムエルは料理人に命じた。「取り分けておくようと、渡しておいた分を出しなさい。」料理人は腿肉と脂尾を取り出し、サウルの

前に差し出した。サムエルは言った。「お出ししたのは取り分けておいたものです。取っておありなさい。客人をお呼びしてあると人々に言って、この時まであなたに取っておきました。この日、サウルはサムエルと共に食事をした。」

これでは和解の献げ物の食事に招待され最上の部分を取り分けられサムエルがサウルと食事をする場面が描かれている。

サムエル記上 11: 14-15

サウルの勝利と即位

「サムエルは民に言った。「さあ、ギルガルに行こう。そこで王国を興そう。」民は全員でギルガルに向かい、そこでサウルを王として主の御前に立てた。それから、和解の献げ物を主の御前にささげ、サウルもイスラエルの人々もすべて、大いに喜び祝った。」

ここでも和解の献げ物をささげている。

サムエル記上 16: 2-5

ダビデ油を注がれる

「若い雄牛を引いて行き、『主にいけにえをささげるために来ました』と言い、いけにえをささげる時になったら、エッサイを招きなさい。……サムエルはエッサイとその息子たちに身を清めさせ、いけにえの会食に彼らを招いた」

サムエル記上 2: 13-16

エリに仕えるサムエル

「…だれかがいけにえをささげていると、その肉を煮ている間に、祭司の下働きが三つまたの肉刺しを手にとって来て、釜や鍋であれ、鉢や皿であれ、そこに突き入れた。肉刺しが突きあげたものはすべて、祭司のものとした。彼らは、シロに詣でるイスラエルの人人すべてに対して、このように行った。そればかりでなく、人々が供え物の脂肪を燃やして煙りにする前に、祭司の下働きがやって来て、いけにえをささげる人に言った。「祭司様のために焼く肉をよこしなさい。祭司は煮た肉は受け取らない。生でなければならぬ。」「いつものように脂肪をすっかり燃やして煙りになってから、あなたの思いどおりに取ってください」と言っても、……」

これは、シロのならずもの祭司がだらしなくて神をないがしろにしている、よくない行為として述べられている。レビ記の教えに従わず、献げ物を軽んじている様子が見てとれる。

2 日常肉を食べる

サムエル記上 14：32-34

ヨナタン（サウルの息子）の英雄的な行動

「兵士は戦利品に飛びかかり、羊、牛、子牛を捕らえて地面で屠り、血を含んだまま食べた。サウルは言い足した。……おのおの自分の子牛でも小羊でもわたしのもとに引いて来て、ここで屠って食べよ。血を含んだまま食べて主に罪を犯してはならない。…」

兵士が戦利品の羊、牛、子牛を地の上で屠って食べたため、血を除くことが出来なかった。そこでサウルは大きな石をころがして来させ、そこで屠らせた。これはかれが主のために築いた最初の祭壇であると述べられている。血を食べてはならないという不変の定め（創世記9：4、レビ記3：17、17：10-12など）を破っている。

サムエル記 25：10

サムエルの死

「……最近、主人のもとを逃げ出す奴隷が多くなった。わたしのパン、わたしの水、それに毛を刈る者にと準備した肉を取って素性の知れぬ者に与えろというのか。」

サムエル記上 28：22-24

サウル、口寄せの女を訪れる

「……ささやかな食事をあなたに差し上げますからそれを召し上がり、力をつけてお帰りください。……女の家には肥えた子牛がいたので急いで屠り、小麦粉を取ってこね、種なしパンを焼いた。女が、サウルと家臣にそれを差し出すと、彼らは食べて、その夜のうちに立ち去った。」

肥えた子牛の料理はめったに食べられない贅沢品であり、女が敬意を込めて丁重にもてなしたことを示す。最初はまったく食欲もないほど意気消沈していたサウルも女や家臣たちの強い勧めに従い、それを食べてから立ち去る。それがサウルにとって最後の晩餐になったであろう²⁸⁾。

4 サムエル記下

サウルが初代の王となることにより、士師時代が終わり統一王国時代へと移行していく。(BC 1002-962)しかし、より王にふさわしい人物であるダビデが登場したあとその引きたて役に甘んじることになる³⁰⁾。

1 神への献げ物—いけにえ

サムエル記下 6：17-19

神の箱をエルサレムへ運び上げる

人々が主の箱を運び入れ、ダビデの張った天幕の中に安置すると、ダビデは主の御前に焼き尽くす献げ物と和解の献げ物をささげた。焼き尽くす献げ物と和解の献げ物をささげ終わると、ダビデは万軍の主の御名によって民を祝福し、兵士全員、イスラエルの群衆のすべてに、男も女にも、輪型のパン、なつめやしの菓子、干しぶどうの菓子を一つずつ分け与えた。民は皆、自分の家に帰って行った。

和解の献げ物としてパン、なつめやし、干しぶどうなどがあげられているが肉はない。

サムエル記下 24：24-25

ダビデの人口調査

「……ダビデは麦打ち場と牛を銀五十シェケルで買い取り、そこに主のための祭壇を築き、焼き尽くす献げ物と和解の献げ物をささげた。主はこの国のために祈りにこたえられ、イスラエルに下った疫病はやんだ。」

ダビデは罪を犯し主の目に悪いことをしたので、主に詫げるために祭壇を築いた。

2 日常肉を食べる

サムエル記下 12：1-4

ナタンの叱責

「二人の男がある町にいた。

一人は豊かで、一人は貧しかった。

豊かな男は非常に多くの羊や牛を持っていた。

貧しい男は自分で買った一匹の雌の小羊のほかに何一つ持っていなかった。

彼はその小羊を養い

小羊は彼のもとで育ち、息子たちと一緒にいて彼の皿から食べ、彼の椀から飲み彼のふところで眠り、彼にとっては娘のようだった。

ある日、豊かな男に一人の客があった。

彼は訪れてきた旅人をもてなすのに

自分の羊や牛を惜しみ

貧しい男の子羊を取り上げて

自分の客に振る舞った。」

これはナタンがダビデの非を気づかせるために使った比喩であるが、旅人に子羊を振る舞ったことがわかる。

サムエル記下 17: 27-29

会戦の準備

「ダビデがマナハイムに着くと、ラバ出身の……が、寝具、たらい、陶器、小麦、大麦、麦粉、炒り麦、豆、レンズ豆、炒り麦、蜂蜜、凝乳、羊、チーズを食糧としてダビデと彼の率いる兵に差し出した。兵士が荒れ野で飢え、疲れ、渴いているにちがいないと思ったからである。」

ここでは羊が兵たちの食糧として差し出されている。どのように料理されたのであろうか。凝乳とチーズは、聖書によつて訳が違う。〈凝乳—cheese, チーズ—cream¹⁹, 凝乳—butter, チーズ—cheese¹⁸〉

戦場へ「羊」を持っていくというのは、旧約聖書の記述としてははじめてである。

以上、動物は食用になっている一面がある。

3 動物の出現と扱い

1 犠牲獣 サムエル記上下には、牛、羊、子山羊、小羊、子牛、雌牛、雄牛などが登場している。主への供え物にしようと、羊と牛の最上のものを取って置いたのです。(サムエル記上 15: 15) というように、これまでレビ記に記載された神に献げる動物の種類と質(上質)は変わりがない。

2 ろば—荷物を積んでいる(サムエル記上 16: 20) また、ろばに乗って山陰を進んで行く(サムエル記上 25: 20) などに使われている。また王様のご家族の乗用(サムエル記下 16: 2)とあり、高級な一面をのぞかせている。

3 獅子や熊は羊を奪い取る者として記述されている(サムエル記上 17: 34)

4 蜂の巣の蜜に浸し、それを手につけ口に入れた。(サムエル記上 14: 27)

5 ある非常に裕福な男が羊 3000 匹、山羊 1000 匹を持っていた(サムエル記上 25: 2) 羊の毛を刈っていたと記述されている。

6 シャコ、蚤—山でシャコを追うかのように、蚤一匹をねらって出陣されたのです。(サムエル記上 26: 20)

7 鷺—鷺よりも速く、獅子よりも雄々しいと(サムエル記下 1: 23) という表現がある。

8 夜は野の獣が襲うことを防いだ。(サムエル記下 21: 10)

9 二人の男がある町にいて、豊かな男は非常に多くの羊や牛を持ち、貧しい男は自分で買った一匹の雌の小羊しか持っていなかった。その子羊は息子たちと

一緒に住み、同じ器から食べ、飲み一緒に寝起きしていた。ある日、豊かな男に一人の客が訪れた。旅人をもてなすため自分の羊や牛を殺してもてなすのを惜しみ、貧しい男の子羊を取り上げて自分の客に振る舞った。(サムエル記下 12: 1-4) 「豊かな男は無慈悲なことをしたので死罪だ」と非難している。(サムエル記下 12: 5-6) 子羊を殺したことは罪であり、罰として生まれてくるあなたの子は必ず死ぬという(サムエル記下 13-14)。子羊自身の固有の価値、神にとっての存在価値2つの価値が破壊されたからだという²⁰。人間と同様の視線で動物を位置づけた聖書本来の姿勢がここにみられた。

ま と め

ヨシュア記、士師記、サムエル記上下における²¹神への献げ物—いけにえ²²、肉食²³動物についての記述を調べた結果、以下に集約された。なおルツ記には取りあげる記載はなかった。

1) 神への献げ物—いけにえ

共通点は、攻略した新しい土地で祭壇を築き、神に焼き尽くす献げ物、和解の献げ物、賠償の献げ物(サムエル記上のみ)をささげた。献げ物—いけにえの内容はレビ記の規定に従い、牛、羊、山羊などであった。また、集まった人たちは神といけにえを共に食べる会食の場面もあった。記述そのものは多くなかったが、さまざまないけにえが登場し、旧約聖書のこれまでの記述と一致し、レビ記の規定に従っていた。神聖な献げ物の準備の段階で献げ物を横取りする場面もあり、モラルに欠ける場面もあった。戦いに明け暮れる中で、民はイスラエルの神の意志に従わず、攻略した土地で異教の神に流される現実もあった。献げ物をささげる祭壇での礼拝が形骸化したこと、本来は主の御声に聞き従うことの方がより重要性であるとサムエルは指摘している。

カナン征服の目的は、カナン人を滅ぼし尽くすことではなく、神の約束を実現して信仰を根づかせることであったのだろう。

2) 日常の肉食

ヨシュア記には日常に肉を食べる例は全くでてこない。士師記では同じく日常では食べられていないが、特殊な2例で肉料理がつくられていた。いずれも神の御使いが訪れたときで、子山羊の肉料理が差し出されている。

肉を食べている場面があるのはサムエル記である。

その場面は次のとおりである。

- ①兵隊の食糧として大麦、豆などの他に羊が仲間入りしている。
- ②兵士が戦利品の家畜にとびかかり血を含んだまま食べ（レビ記で禁じている）罪を犯している。血を含んでいる肉を食べたので罪であると指摘されている。
- ③客人に子牛の料理を振る舞う。
- ④家畜を所有する主人が羊の毛を刈る人に肉を振る舞う。

兵隊は非日常と考えるとして、④は日常であろうか。

3) 動物とその扱い

- ①戦乱の世であるため、家畜は戦利品として奪われ、持ち帰り、分配されている。
- ②戦時下、敵の町が焼き討ちにされ、家畜もろとも焼き尽くされる。
- ③戦車を引く馬は、敵の馬を再起不能にするために足の靱帯が切り捨てられる。

などである。戦争という特殊な状況下で動物も人間同様に残虐で非情な扱いを受けている。非常事態における動物は人間と同じ運命共同体として無惨に扱われる。

動物として注目を引くのは、家畜を襲い恐れられている野獣である。獅子、熊、ジャッカルなどの記述がみられた。

そんななかで、1カ所、子羊の価値を重んじた比喩があり、創造主である神の思いに立ち帰った動物観が述べられ、動物の存在意義を思い起こさせた。

以上、聖書の世界において肉食がどのような経緯で日常化していくのか探っている。不思議に思うのは、攻略したカナンを中心とする土地では農産物と並んで家畜が多い。にもかかわらず肉食が BC 1235～1000年の約 235 年間にわたって、特殊な場合を除いて依然一般化していないことである。創世記に述べられている“草食”の神の意図が大きく崩れることなくお続いていた。

文 献

- 1) 高橋 虎, シュナイダー監修, 石川康輔編集: 新共同訳 旧約聖書注解 I 創世記一エステル記 p. 430

日本基督教団出版部 1996

- 2) 奥田和子: 旧約聖書に見られる神の贈り物一食べ物の群像 甲南女子大学研究紀要 38号 人間科学編 2002
- 3) 奥田和子: 聖書は肉食・動物をどう扱っているかー創世記 甲南女子大学研究紀要 41号 人間科学編 2005
- 4) 奥田和子: 聖書は肉食・動物をどう扱っているかーシナイと荒野の旅: 出エジプト記・レビ記, 民数記, 申命記 甲南女子大学研究紀要 42号 人間科学編 2006
- 5) 日本聖書協会: 聖書 新共同訳 旧約聖書続編つき 日本聖書教会 1988
- 6) ロバート・L・ハリス著, 大坪孝子訳: 図説聖書の大地 p. 116 東京書籍 2003
- 7) 前掲書 1), p. 424
- 8) 前掲書 1), p. 383
- 9) 前掲書 1), p. 389
- 10) 前掲書 1), p. 390
- 11) 前掲書 1), p. 408
- 12) 前掲書 1), p. 395
- 13) 高橋正男監修, ジョン・ロジャーソン著: 旧約聖書の王歴代誌 p. 54 創元社 2000
- 14) 荒井猷, 石田友雄編: 旧約, 新約聖書大事典 p. 812 教文館 2001
- 15) 前掲書 1), pp. 444-445
- 16) 前掲書 1), p. 444
- 17) American Bible Society: Good News Bible –today's English Version (ed. 2) p. 202 American Bible Society, New York 1992
- 18) 和文・新共同訳, 英文・Today's English Version: 聖書 GOOD NEWS BIBLE p. 489 日本聖書協会 2000
- 19) 前掲書 1), p. 442
- 20) 前掲書 1), p. 447
- 21) 前掲書 1), p. 463
- 22) 前掲書 1), p. 444
- 23) 前掲書 1), p. 465
- 24) ピーター・ミルワード, 中山 理: 聖書の動物事典 p. 173 大修館書店 1992
- 25) ジョン・ボウカー編著: 聖書百科全書 p. 119 三省堂 2000
- 26) 前掲書 1), p. 498
- 27) 前掲書 1), p. 535
- 28) 前掲書 13), p. 90
- 29) チャールズ・バーチルーカス・フィッシャー著, 岸本和世訳: 動物と共に生きる pp. 96-97 日本基督教出版局 2004